人魚ではなく

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人魚ではなく

【Ｎコード】
Ｎ５０２１Ｉ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
長い航海の中で海に見たものを人魚と思ったがそれは。しかし実は後ろに。こんな話が大航海時代は結構ありました。

第一章

人魚ではなく

長い航海だった。それも数ヶ月とかそんな単位ではない。
もう一年以上経っている。彼等はそれだけ船の上にいた。
「ねえ船長」
若い船員の一人が髭だらけの顔の中年の男に声をかけてきた。
「もう何日陸を見てないですかね」
「もう一月になるか？」
船長と呼ばれたこの髭だらけの顔の男は暫く考えてから彼に答えた。
「そういえば」
「そうですよね。一応食べ物はまだ結構ありますけれど」
「陸は見てないな」
「ええ」
そんな話をしていた。確かに周りは見渡す限りの大海原だ。群青の海が何処までも広がっている。空もまた青で所々に白い雲が見える。だが辺りは何もない。全て水平線であった。
「もうかなり」
「たまには陸が見たいものだな」
「あとどれ位で島ですか？」
若い船員はこう船長に尋ねた。
「それで」
「確か一週間か」
船長はまた考える顔になった。そうしてこう彼に答えたのだった。
「それ位このまま進めばそこに島が見える」
「島がですか」
「一応そういうことにはなっている」
こうも船員に言うのだった。

「一応はな」
「風に流されていなければですね」
「そういうことだ。おい爺さん」
「あいよ」
ここで船長は自分の隣にいる腰が少し曲がって小柄な老人に声をかけてきた。その顔は潮に焼けて黒くなっており顔は飄々として皺が愛想よい感じである。その老人が船長に応えて出て来たのであった。
「航路はいいんだよな」
「よいぞ。夜の星がそう教えてくれておるわ」
「そうか。ならいい」
船長は老人の言葉を聞いて納得した顔で頷いた。
「それならな」
「航路は星が教えてくれるからのう」
老人はここでまた笑いながら言った。
「あとはじゃ」
「これでだな」
船長は今度は自分の目の前にある大きな針を見た。それはある方向をずっと指し示していた。今度はそれを見て言うのであった。
「羅針盤もある。これも教えてくれる」
「星と羅針盤があれば全然違いますね」
若い船員は老人と羅針盤を交互に見ながら船長に言った。
「本当に」
「船に乗るからにはこの二つが必要だ」
船長も彼に顔を向けて答えた。
「この両方がな」
「ええ。じゃあ俺も」
「この二つのことは絶対に覚えておけ」
船長の言葉が強いものになった。
「いいな」

「わかりました」
船員も彼の言葉に頷く。そんな話をしながら海を進んでいく。そうして数日が経った。そうしてもう少しで陸が見えようという時だった。
「あれっ、船長」
「どうした？」
船員は陸を発見しようと海を見ているところで船長に声をかけてきたのだ。
「何か見えましたよ」
「陸か？」
「それはまだですけれどね」
陸ではないというのだった。船長はそれを聞いて少し落胆してしまったのだった。
「もう少しだとは思いますけれど」
「何だ、陸ではないのか」
「けれど海に何か見えたんですよ」
しかし船員はここでこんなことを言うのだった。
「何かね」
「何だ？鯨か？」
「鯨にしちゃ小さいですね」
だが船員はそうではないというのである。
「鯨じゃないですね、あれは」
「では海豚か」
船長は鯨にしては小さいと聞いて今度はこう返した。
「それか？」
「あれっ、海豚でもないですよ」
しかし海を見続けている彼は今度はこんな言葉を返した。

第二章

「あれはどうも」
「鯨もで海豚でもない」
船長はそれを聞いて首を傾げさせた。
「じゃあ何なんだ？鮫か？それとも大きな魚か？」
「それがおかしいんですよ」
船員の言葉もどうにも要領を得ないものだった。少なくとも船長から見てはそんな感じになっていた。そう聞こえるものに聞こえていたのである。
「どうもね」
「では何がいるんだ」
「人間ですかね」
彼は今度はこんなことを言った。
「あれは」
「人間！？」
「顔はそんな感じですよ」
「顔！？」
「ええ、頭はです」
船長は船員の話を聞くうちに余計に話がわからなくなった。それでまたしても首を傾げるのだった。話がさっぱりわからなくなっていた。
「頭は人間のものですね」
「頭は人間！？」
「それに下は魚ですね」
若者はさらに妙なことを言った。
「！？上が人間で下は魚っていいますと」
「人魚か！？」
船長も言った。

「というとだ」
「ええ、何かそんな感じですよ」
船員は相変わらず海を見続けている。そのうえで言うのだった。
「あれは」
「人魚！？本当にいたのか」
「ええ。御覧になられますか？」
「それを早く言え、全く」
船長は呆れたような声で船員の傍に来た。そのうえで彼も海を見るが確かにその海には何かが泳いでいるのが見える。
下は魚だ。それに上は人間に似ている。それを見れば確かに人魚だった。
「あれ、人魚ですよね」
「ううむ」
船長もその不思議な生き物を見て怪訝な顔になっていた。
「今まで生きている時間の殆どを船の上、海で過ごしてきたが」
「人魚を見るのははじめてだ」
「あれっ、そうだったんですか」
「大体人魚を見た人間に会ったことがあるか？御前も」
「いえ、ないですけれどね」
若者は少しとぼけたような調子で船長の今の言葉に答えた。
「見たこともないですし」
「それは俺も同じだ。まさかここにいたとはな」
「けれど人魚は本当にいたんですね」
「ううむ」
船長はその顎鬚を撫でながら考える顔になっていた。他の船員達も皆船の手すりのところに来てその人魚の様なものを見ている。そうしてそのうえでそれぞれ言うのだった。
「まさか人魚がいるなんてな」
「ああ、俺はじめて見たぜ」
「俺もだ」

誰もがはじめて見るものであったのだった。
「しかも一匹だけじゃないぞ」
「ああ、何匹もいる」
「何匹もいるじゃないか」
しかも一匹だけではなかった。海に何匹もいた。そうして海をのどかに泳いでいるのだった。
「こんなにいるなんてな」
「人魚も多かったんだな」
「ああ、全くだ」
ところがであった。ここであの老人が出て来て。そのうえで言うのだった。
「ああ、あれは人魚ではないな」
「えっ！？」
「爺さん、今何て」
「あれは人魚ではないな」
彼はあらためて言うのであった。

第三章

「あそこにいるのは」
「人魚ではない！？」
「まさか」
「いや、そのまさかだよ」
驚く他の船員達に対して老人は言葉を続ける。
「あれはね。人魚ではなくて」
「人魚ではないとすると」
「一体何だ？」
「あれはジュゴンだね」
それだというのである。
「ジュゴンだよ。ああして集まってのどかに泳いでいるんだよ」
「ジュゴン・・・・・・」
「そんな生き物も海にはいるのか」
「そうなんだよ。わしも人魚は見たことがないなあ」
そして人魚についても皆に話した。
「今まで。見た人に会ったこともない」
「俺と同じか」
ふと呟いたのは船長だった。
「だとすると」
「大きなイカと鯨の戦いは見たことはあるがね」
それはあるというのである。つまりマッコウクジラとダイオウイカの戦いである。マッコウクジラはダイオウイカを餌としておりその際に海で激しい戦いを繰り広げるのだ。
「人魚はないのう」
「じゃあやっぱり違うのか」
「何だ」
「全く。何かと思えば」

皆それを聞いてがっかりとした顔になってしまった。
「まさかと思ったのがな」
「おい」
そのうえで船員に対して言うのだった。
「今度から見間違えるんじゃないぞ」
「もっとしっかりしろ。いいな」
「はあ、すいません」
船員も平謝りに謝るだけだった。彼もかなり申し訳ないと自分で思っていた。
「まさかと思いまして」
「誰もが一度は見間違えるものじゃよ」
老人はそんな船員を庇うようにして笑って言ってきた。
「じゃから。そんなに気にするな」
「そうですか」
「そうだな。ではこの話は終わりだ」
船長もこの騒動を終わらせにかかってきた。
「それでは陸に上がる用意をするぞ」
「あっ、見えてきましたよ」
船員はここで目の前を指差して高い声をあげた。
「陸です、あそこです」
「おお、確かに」
「間違いないな」
皆も彼が指差した方を見て声を上げた。
「陸だ。じゃあ上がってな」
「食い物を仕入れて」
まずはそれだった。生きる為には何があっても必要だからだ。そしてそれだけではなかった。
「新鮮なものもたらふく食ってな」
「あと水だ、水」
これも必要だった。人間にとって食べ物と同じかそれ以上に必要

なものである。だから彼等は今水だと叫ぶようにして言ったのである。
「水も飲んでな」
「船に積んでな」
「忙しくなるぞ」
船長も楽しげに笑って言う。
「上陸したらな」
「ええ、それじゃあ」
「行きましょう」
「とーーりかーーじ！」
船長は満面の笑顔で陸の方に進むよう告げた。
「上陸だ。いいな」
「了解！」
「合点です！」
彼等は満面の笑顔で上陸にかかる。もう人魚のことは完全に忘れていた。
その彼等の船の後ろで今飛び跳ねたものがあった。それは。
魚の尾を持っている。青緑の鱗が美しく輝いている。
そしてその顔は麗しいまでに整っていた。二つの乳房が艶かしい。
二本の腕も上手に使い泳いでいる。そうして青く長い髪が不思議な美しさを見せている。
その不思議な存在は海から出て暫く泳いだうえで海の中に消えた。船の上にいる人間達はこの存在には気付くことがなかった。そのままずっと気付かず陸に上がって楽しい時を過ごすのだった。

人魚ではなく　　完

２００９・８・１９

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5021i/

人魚ではなく

2010年10月8日15時27分発行